

發生期の英国日記二章

佐 野 英 一

ま え が き

もう 30 年近くも前、Blunden は東大の英文科の学生に向つて、文学常識を授ける目的からだろうと思われる、アルプス
ベクト順に英文学用語を解説した *Principles and Methods in English Literature* という講義をした。その Diary の項に
は

To have genuine historical & psychological value

1. Must be written every day, without time for reflection & revision,
2. Must be written *without* any eye on a publisher & a public.

It doesn't matter what the style is, or the author's class or employment—the interest lies in the self-revelation.

S. Peyps, J. Evelyn — 17th c.

F. Burney, J. Wesley — 18th c.

H. C. Robinson, B. R. Haydon, T. Moore — 19th c.

W. N. P. Barbellion — 20th c.

と簡潔に要点を学生にノートさせた。

また、1930 年出版の Arthur Ponsonby の *British Diarists* には 9 best diarists を選べば次のようになるとある。
年代は生没年でなく、日記のつけられた期間である。

Samuel Peyps, 1660-69; James Woodforde, 1758-1801; Fanny Burney, 1786-1819; William Jones, 1774-1821;

Benjamin Haydon, 1786-1828; Dorothy Wordsworth, 1798-1828; Sir Walter Scott, 1825-1832; Caroline Fox, 1834-1871; W. N. P. Barbellion, 1903-1919.

その後の発見や発表による追加, その他すべての註釈をここではやめて, この二つの摘記をそっくりそのまま読者の予備知識に拝借しただけで, 私自身は, 17 世紀の二大日記筆者 Pepys と Evelyn が現われる以前の日記に関して, 二三の方面から探究の側光をあててみることにする。

第 1 章 日記の起源と十七世紀前半までの日記

Marcus Aurelius (2 世紀のローマ皇帝でストア派の哲学者) の「瞑想録」(*Meditations*) のある英訳⁽¹⁾を読んでいると, Book III, 14 に至つて, Wander at random no longer. Alas! you have no time left to peruse your diary, to read over the Greek and Roman history, or so much as your own commonplace book, which you collected to serve you when you were old. (もはやいたすらに迷うな。悲しや汝には, 汝の日記を読む時間も残っていない, キリシア, ローマの史書を繙き, 老後のために集めておいた自己の書置き帳すら, 読む時間が残されていないのだ。) という文句が出て来る。

これによつて見ると, 古典時代にも日記というものがあったかのごとく感ぜられるが, 実にはそうではない。問題の部分を別の英訳⁽²⁾は thy moral commentaries としており, 更に原文のギリシア語は *ὑπομνηματῶν* で⁽³⁾, memoranda (備忘録) の意味にすぎない。

ローマ時代には, 手紙には Cicero (106-43 B. C.) や Pliny the Younger (?62-113) のものが相当残つていて, 前者では Caesar にまた暇があつたら訪ねてくれ, などとあつたり, 後者では, 79 年 8 月 24 日の Vesuvius 山の噴火と, その際の父の死が詳述されていたりして, 面白い読物を提供してくれるものらしいが, 日記の方は, 今日われわれが考えるようなものは古典時代になかつたと言つてよい。

ラテン語の言葉として *commentarii* の一部が僅かにこれに当る。 *commentarii* と言えば, すぐ頭に浮ぶのは有名な Julius Caesar の「ガリア戦記」(*Commentarii de Bello Gallico*) であるが, これはゴール (Gauls, 今のフランス) の諸族を平らげて歩いた記録である。

commentarii はすべて記憶を助ける覚え書き, 備忘録の類を指す語であつた。そのなかに祐筆の役を勤める奴隷に日目の

の家事をつけさせたものがあり、それが一番日記に近い。小説であるが Petronius (3-66) の *The Satyricon* のなかにその例が見られる。Trimalchio というお大尽が大がかりな饗宴を催していると、そのダンスの最中を中断して、そのような記録係り (actuarus) が、そのような記録を読み聞かせに現われる。The *Satyricon* 第 53 節である。

But a clerk quite interrupted his passion for the dance by reading as though from the gazette: "July the 26th. Thirty boys and forty girls were born on Trimalchio's estate at Cumae. Five hundred thousand pecks of wheat were taken up from the threshing-floor into the barn. Five hundred oxen were broken in. On the same date: the slave Mithridates was led to crucifixion for having damned the soul of our lord Gaius. On the same date: ten million sesterces which could not be invested were returned to the reserve. On the same day: there was a fire in our gardens at Pompeii, which broke out in the house of Nasta the bailiff." "Stop," said Trimalchio. "When did I buy any gardens at Pompeii?" "Last year," said the clerk, "so that they are not entered in your accounts yet."⁽⁴⁾

(しかし、一人の記録係りが、公報からでも読むように、次のように読み出して、彼のダンスに対する熱意を冷めた。[七月二十六日。クマエなるトリマルキオ殿所領内にて男児 30 名女児 40 名出生。小麦 50 万ベック打穀場より収蔵。牡牛 500 頭剛致。同日、奴隷ミトリダテス御主人ガイウス様を罵りたるかどにより十字架に引かる。同日、投資不能の老千方セスタース準備金へ返納。同日、ボンベイの庭園において監理人ナスタの家より出火。]「ちよつと待て」とトリマルキは言つた、「いつ俺はボンベイに庭園を買つたかね。」「昨年でございます」と記録係り、「それ故まだ御勘定のなかに記入してございません。』)

この *The Satyricon* をもう少し読んでゆくと、一人のボーイ (奴隷) が誤つてころんで主人トリマルキオの腕を傷ける。いかなる厳しい勘氣にふれるかと並居る客がはらはらしていると、主人は、奴隷のために負傷をしたをあつては估券にかかわると言つて、かえつてその奴隷を自由人にしてやり、そのあげく、「これは記録して置くことだ」と言つて、書く材料をとり寄せる。その所が The Modern Library の William Burney の英訳では and so calling for the journal となつてゐるのだが、この journal も原文は codicillos で writing-tablet (書き板) ぐらいの意である。

上記のような記録は、これをたとえば、次のようなものと比較するならば、われわれの考える日記ではないことが、しみじみと解らう。

Jan. 1st, abowt nine of the klok afternone, Michel, going chilyshly with a sharp stik of eight ynches long and a little wax candell light on the top of it, did fall uppon the playn bords in Maries chamber, and the sharp point of the stik entred throwgh the lid of his left ey toward the corner next the nose, and so persed throwgh, inso-much that great abundance of blud cam out under the lid, in the very corner of the sayd eye; the hole on the owtside is not bygger then a pyms hed; it was annoyed with St. Johns oyle. The boy slept well. God spedde the rest of the cure!⁽⁶⁾

(一月一日、午後9時頃、マイクルは長さ8インチの尖った棒の先に小さな蠟燭をともして遊んでいたが、マリーの部屋で平板(?)の上にごろんで、棒の先が、左眼のまぶたを鼻に近い眼頭の方へとはいり、突きささつたので、前記眼のその眼頭のところのまぶたの下から血がたくさんに出た。外から見た次の大きさはピン先の先ほどしかない。聖ヨハネ膏を塗っておいた。子供はよく眠つた。あとの治癒も神饗によりうまくゆきますように!)

わが子の怪我に戦く親の心がじかに伝わるようなこの一文は、Dr. John Dee (1527-1604) が1588年 Surrey 州の Mortlake で書いた日記である。

ギリシア語にはエフエーメリス (ἐφ'ημερίς) という語があつて、これが diary の語にあてられているが、これも Liddel and Scott の辞典には *a diary, journal, such as Caesar's Commentarii* とあつて、たとえ個人が記録したにしても、公的な記録でしかないと云つてよからう。

英語の diary の直接の語源であるラテン語 diarium は dies (=day) から派生した形容詞の中性名詞化したもので、初めは兵士または奴隸に対する一日の食糧の割当ての意であつた。それが中世ラテン語 (Middle or Mediaeval Latin, およそ 600-1500 年) の時代に、日々の記録の意になつて来た。

In the thirteenth century men never kept diaries or journals ... but monasteries did. (十三世紀には個人は日記をつけなかつたが僧院はつけた) という言葉が Angustus Jessop (1823-1914) という著述家の *The Coming of the Friars and Other Historical Essays* (1889) 中にあるが、このように日記は初めは公的の記録であつた。ただここに、中世アイルランドの筆耕のマージナリアというものがあり、日記ではないが、感じが可なり日記に近い書き物である。これは1926年の "Proceedings of the British Academy" の Charles Plummer: *On the Colophons and Marginalia of the Irish Scribes* に

より、P. A. Spalding がその日記に関する小冊子 *Self Harvest* (1949) に引用しているのを、私は採引きさせてもらう。

It is one thousand three hundred and fifty years to-night since Jesus Christ was born, and in the second year after the coming of the plague to Ireland was this written, and I myself am full twenty-one years old... It is Christmas Eve to-night, and under the protection of the King of heaven and earth am I on this Eve to-night. May the end of my life be holy, and may this great plague pass by me and my friends, and return us once more to joy and gladness. Amen. Pater Noster. Hugh, son of Connor MacEgan, wrote this on his father's book, the year of the great plague.

(今夜はキリスト降誕以後 1350 年、疫病がアイルランドに來襲後 2 年目にこれは書かれた。そして自分は満 21 歳。……今宵はクリスマス前夜で、天地の王の加護により自分は今夜この前夜に遭う。願わくばわが生涯の終の聖純ならんことを、またこの大疫が自分と自分の友人をす通りし、われらが再び喜悅歡喜に立ち戻らんことを祈る。アーメン。われらの父よ。コナー・マッキエガンの子ヒュー、父の書中に大疫の年これを認む。)

It is the Friday before Christmas to-day, and it is pouring heavily now at the beginning of night... I am very cold without fire and covering... the robin is singing gloriously, but though its red breast is beautiful, I am all alone. O God, be gracious to my soul, and grant me a better handwriting... I am dreadfully worried about my writing, but let me not be blamed, for the ink is bad, and the vellum defective, and the day is dark. I am grieved for the tidings which I hear even now, that my mother and sister have died in Spain.

(今日はクリスマス前の金曜日で、夜の初めの今、雨が激しく降っている。火もかぶるものもなく自分はひどく寒い。……駒鳥がすばらしく鳴いているが、その赤い胸は美しくても私はひとりぼっちだ。おお神よ、わが魂に恩寵を垂れ給い、われにより良き筆蹟を下し給え。……ひどく自分の字が心配だ。だが責めてはもらいたくない、インクが悪く、羊皮紙は粗末で、日も暗い。たつた今受けとつた母と妹がスペインで逝つたという知らせに悲んでいる。)

この marginalia には、このような個人的感懷のほか、今筆写している稿本についての評言はもとより、公的な事件、逸話、抑鬱や悪口まであつて、それが時に暗号や、ラテン、ゲーリック、さてはオガム (Ogham) 文字で、書かれているといふ。

ヨーロッパに今日いう意味の日記が現われるのは文藝復興期の終りであるとしてよい。ヨーロッパ全体が一つの教会のもと

に共通の文化を持つという社会が崩壊し始めて、一方には古典の学問の復興による思想の自由が得られ、他方には宗教改革による良心の自由が得られるようになってからであつた。換言すれば、日記は個人が尊重され、人間の個人意識の発達した結果の産物と見なさねばならぬ。

英国で最古の日記⁽⁶⁾は 10 オペ位につき 16 オペ死んだ英王 Edward VI (1537-53) が 1549-52 年につけた日記だとされる。これは一時偽作ではないかという疑も抱かれたがまづ本物であろうということになっている。大陸ではもう少し早く、ドイツの画家 Albrecht Dürer (1471-1528) は 1520 年の Flanders 旅行の日記をつけており、これが作者の判明しているヨーロッパ最古の日記であろうと言われている。

作者不明のものとなると、フランスに遙かに古いのがある。すなわち「パリ市民の日記」(*Journal d'un Bourgeois de Paris*) というもので、これは 1409-31 年まで、その後別人の手で 1449 年まで書き継がれ、折から百年戦争末期で、イギリスとその同盟国ブルゴニヌ (Bourgogne, 英語で Burgundy) の支配下にあつた当時の世情を目的あたりに伝える貴重な史的文献とされている。

ここでもよつと、日本文学との比較をしてみると、日本の日記は桁ちがいに古い。平安朝日記文学の最初に来る「土佐日記」は承平 4 年 (西暦 934 年) から翌年の春までのことを取扱つてゐる。日本文学では、いわゆる日記文学と称される文学としての日記と、単なる記録・史的資料たるにとどまる日記とのあいだのけじめが割あいには判然としているのだが、英文学では必ずしもそうではない。その意味から、日本文学で文学と認められない「三代御記」中の「寛平御記」(890)だとか、「醍醐御日記」(929) などといったぐいのものまで考えれば、更に古くからあることになる。日本では、規範力の強烈なキリスト教という宗教の影響を受けず、その上、島国で比較的泰平の世を楽しみ得たという事情が、かくも早くからこの種の個人的書き物を出現せしめたのであるうか。これは、しかし、ほんの思いつきの私見にすぎない。

Edward VI 以後 Pepys, Evelyn 時代に至るまでの主なる日記筆者を次に列挙する。年号はやはり日記の書かれた、または、現存する期間。

Henry Machyn, 1550-1563; Dr. John Dee, 1554-1601; Sir Francis Walsingham, 1570-83; Sir Thomas Coningsby, Aug. 13-Dec. 24, 1591; Philip Wyot, 1586-1608; Adam Wintthrop, 1586-1617; Margaret Lady Hobby, 1599-1603; James Melville, 1571-1610; Sir Simonds d'Ewes, 1619-36; Sir Henry Slingsby, 1638-48; Anne Clifford, 1603, 1616

1617, 1619, 1676.

これらの人々についての以下の記述は、多く Arthur Ponsonby の著書⁽⁹⁾によらねばならない。

Edward VI の日記は、外国使節の応接、皇族の来訪、政治犯の処刑などを記録したもののだが、ロンドン⁽¹⁰⁾の葬儀屋ベンリ・メイチン (?1498-?1563) の日記は、職業がら、当時の式典、pageant, procession, 裁判、刑罰などが多く記録され、そのなかに時々個人的な記録がでてくる。そして面白いことには、まだ自分を三人称で書いている。宗教的には旧教に傾いているが、これはその方が儀式が念入りに行われて、自分の職業に都合がよいからであろう。

[1552] The first day of July ther was a man and a woman on the pelere in Chepe-syd; the man sold potts of straberries, the whyche the poit was nott alft fulle, but fyllyd with forne; the man nam ys Grege; sum-lyme he conferteit[ym selfe a profett, for he was taken for [it, and] sett by the pelere in Sowthwarke... ⁽⁹⁾

[1552 年] 七月一日、一人の男と一人の女がチャーサイドで曝し合にかけられた。男は苺のびん詰を売ったが、そのびんにはいちごは半分もはいっていない、あとは糠(ぶ)がつめてあった。男の名はフレグといい、賈て予言者と自称した男。この故に彼は捕われサザクで曝し合にかけられた……)

[1554] The xxj day of July by x of the cloke [was proclaimed] thrug London that the prynde of Spayne was [arrived at Southampton] and that evere pere and lord and lade shuld [resort] unto her grace cete of Wynechester with all spede to her graceus weddyng.

[1554 年] 七月二十一日、十時ロンドン中に、スペイン王 【本稿筆者註、Philip II】 がサウサンプトンに到着されたから、すべての貴族諸侯淑女は急ぎウインチェスター市なる女王のもとに推参し、御成婚に参するよう布告された。

[1563] The vii day of Aprell at sant Katheryns beyond the Towre the wyff of the syne of the Rose, a tavarne, was set on the pelere for etying of rowe fiesse and rostyd boytt, and iiii women was sett in the stokes all nyght tyll ther hosbandes dyd fseyche them hom...

[1563 年] 四月七日、ロンドン塔城の向うの聖カサリノ寺のほとりで、料亭「薔薇屋」の女将が、生肉焼き肉共に食べたかどにより曝し合にかけられ、また4人の女はそれぞれ良人が引とりに来るまで一晩中、足枷曝しにされた。……)

最後の引用は、エリザベス女王の漁撈業者優遇策から、Lent (四旬節、大斎) その他に 'fish days' を設けて獣肉を食うこ

とを禁じたのに違反して罰せられたものである。G. M. Trevelyan が *English Social History* (1942, 1946²), p. 190 で、さりげなく, These fish laws were enforced by actual penalties. In 1563 we read of a London woman being pilloried for having flesh in her tavern during Lent. (この食魚法は現実の刑罰をもつて実施された。1563年に、四旬節中に自己の料亭で肉をたべたがために曝されるロンドン女のことが物の本に見える。) と言っているのは、この日記などに準拠しているものである。

先に息子マイクル負傷のところを引用した Dr. John Dee は占星学者で数学者で、当時の魔法使いである学者、エリザベス女王もしばしば訪問した人。

1581. March 8th it was the 8 day being Wednesday, hora noctis 10-11, the strange noyse in my chamber of knocking; and the voyce, ten tymes repeted, somewhat like the shrill of an owle, but more longly drawn and more softly, as it were in my chamber.⁽⁹⁾

(1581年、三月八日、八日は水曜日であつたが、夜 10-11 時、自分の部屋でふしぎな叩く音がする。そして声が十回繰返された。それはふくろの啼き声にやや似ているがもつと長く、もの歌かにひびき、あたかも自分の部屋でするかうだつた。)

先に引いた例といいこれといい、この人の日記は、もう、後に出る Pepys の一節を語んでいるようである。

サー・フランク・ウォルシントンガム (? 1530-1590) は政治家で、彼の日記は燕鷗外の晩年の日記のように、出来事だけを簡単に記録して行つたもの。サー・トマス・コニングスビ (? -1625) は軍人で、Earl of Essex がフランスの Rouen に遠征する軍に加つた期間の日記をつけていて、military diary の最初のものである。

フアリッゾ・ウナイオット (生涯年不詳) は Devonshire の Barnstaple の town clerk であつた。この Barnstaple という町は、20 世紀になつて Barbillion という diarist が生れる町である。この日記も大体は public events を記した objective diary であるが、この 1563 年の項に "long Drieth" (長期の旱魃) があつたことを記し、また同年九月の終にはもう河水が氷つたこと記して、これは次章に取扱う Dr. Simon Forman の日記中の気候不順の記録に符合ないしは連続するものである。

Adam Wintrop (? -1623) は、アメリカの Massachusetts の知事で長い間半公的な日記をつけ、南隣の Plymouth の Bradford の *History of Plymouth Plantation* と並んで New England 植民史初期の貴重な文献となつてゐる *Wintrop's*

Journal を書いた John Wintthrop (1588-1644) の父である。Suffolk 州の lord of Groton Manor で、羅紗業者 (cloth-worker) であった。Margaret Lady Hoby (?-1633) は Castiglione の *The Courtier* の翻訳 (1561) 者 Sir Thomas Hoby (1530-1566) の第二子 Sir Thomas Posthumus Hoby の妻で、Yorkshire の Scarborough の近くに住んでいるのだが、ロンドンにも時々出て来る。婦人の日記筆者の知られている最初の人で、同時に、毎日規則正しくつけられた日記の最も早いものの一つである。

James Melville (1556-1614) のものは、スコットランドの現存する最古の日記で、筆者は宗教改革家。スコットランド宗教史上の文獻としては面白いという。この筆者はアメリカの小説家 Herman Melville (1819-91) の祖先の一族らしい。

以下は 17 世紀にはいる。17 世紀後半はもはや英国日記の始原期とは言えないから、John Evelyn の日記の始まる 1740 年代以前のもののみに言及して、この章を切りあげることにしよう。

サー・サ・モンズ・デューズ (1602-50) は Dorset 州の Corden に生れた弁護士で、M.P. で好古学者 (antiquary) で、Suffolk 州の High Sheriff を勤めた人。その日記には英王 James I の次のようなユニークな姿が捉えられている。(40) 1621 年議会の開院式に行く James I である。

First he spoke often and lovingly to the people standing thick and threefold on all sides to behold him, "God bless ye! God bless ye!" Contrary to his former hasty and passionate custom which often in his sudden dissembler would bid a p—— or a plague on such as flocked to see him. Secondly, though the windows were filled with many great ladies as he rode along yet that he spake to none of them but to the Marquis of Buckingham's mother and wife: that he spake particularly and bowed to the Count of Gondomar the Spanish Ambassador; and fourthly looking up to one window as he passed, full of gentlewomen or ladies, all in yellow bands, he cried out aloud "A p—— take ye! are ye there?" at which being much ashamed they all withdrew themselves suddenly from the window.

(第一に王は、以前には自分を見に集った人々に、唐突に機嫌を損じて、畜生め、くたばりやがれ! をよく喚わせた、あの気早やな翻機もちの習慣とは打ってかわつて、見物のために周囲にびつしりと三重にも立つ人々に向つて、「やあ御きげん好う、御きげん好う!」と、しばしば、しかも親しみ深く言つた。第二には、王が乗り過ぎる途上の窓々はお歴々の貴婦人で満ちていたにも拘らず、バッキンガム侯母堂と夫

人以外には誰にも話しかけなかったこと、またスペイン大使ゴンブール伯には特に声をかけお辞儀をしたこと、そして第四には、通りすぎる一つの窓が皆黄色のバンドを身につけた貴女淑女に濡れているのを見上げて、「こんな畜生！ そんなところにいるのか！』とどなったので、みんな大いに恥じて急に窓から引込んだ。）

シェイクスピアのせりふに出る罵倒の言葉 *A pock upon —!* がここでは生きて使用されていて、まことにすさまじいものだ。

サー・ヘンリ・スリングズビー (1602-58) は議員で軍人で王党派であつたから、Charles I の軍に従い、各地に転戦した。しかしそのような政治上軍事上の日記よりは、それ以前の家庭向きの、人情深い人柄のよく現われている部分がすぐれている。この人はフランスの Montaigne (1533-92) 家事日記帳 (*Day-Book*) に暗示されて日記をかき出した。そして Sir Walter Scott がこの日記の選抄を 1806 年に編集出版した。Scott の日記のなかに自己に先んじて死んだ妻に対する思慕の情を綴つた箇処が出て来るのだが、Slingsby も、幾人も医者を変えて看護した妻に死なれる。最も優秀な日記の一つに数えられる Scott 晩年の日記は、直接には Byron の *Ravenna* 日記に刺戟されて書き始められたものと Scott 自身も言っているのだが、この Slingsby のものも多少の影響を Scott に与えているのではないかという疑いが持たれる。Charles I の死は、この日記の最後に次のように言及される。

But not withstanding all his prayers and intreaties they would not release him: and while I remained concealed in my house I could hear of his going to Holmby, to the Isle of Wight and to Whitehall at last; where he end'd his good life upon the 30 of January 1648-9.⁽¹⁾ I hear *heu me*; *quid heu me?* *humana perpesti sumus*. Thus I end'd these commentaries or book of remembrance beginning in the year 1638 and ending in the year 1648⁽²⁾.

(しかし、王がいかに嘆願懇願しようとも彼らは彼を釈放しなかつた。そして自分が自宅にかくれている間に、王はホームビー、ワイト島へ、ついにホワイトホールへつれて行かれたと聞いた。そしてそこで王は1649年一月三十日にそのよき生涯を終つたのである。自分には「私のために悲しむのか、何の悲しむことがあるう。余は人事に堪えた」が聞こえる。かくて私の覚え書きは終る。1638年を始めとして1648年を終として。)

妻を弔した彼自身も、1655 年 Hull における王党の陰謀に連坐して、最後は従容として首を刎ねられた。

アソ・クリフォード (1590-1676) は Countess of Dorset、のち再婚して Countess of Pembroke という身分の、男まさりの婦人で、長年にわたる遺産相続の訟訴などをしていゝる。長期にわたつて書かれた日記であるが初めに記した年代の部分で

残っていない。これは比較的新しく 1923 年に現代女流作家 Victoria Sackville West の編纂で *The Diary of Lady Anne Chifford* として刊行された。

まだこのほかに、Slingsby とは反対に一時は議会議会派の軍に加わったが間もなく田舎に引きこもって読書三昧に入った Adam Eyre (1614-?) という yeoman の日記 (1646-49) などがある⁽¹³⁾が、John Evelyn の日記は既に 1640 年から始っていて、もうこの頃になると、英国の日記は幼少期をすぎた壮年期、否、最も華々しい開花期に入らんとしている。

以上、私は英国の始源期の主なる日記を、大体年代順に辿って来たが、この期のものには、言わば *un-diary* の域から真の diary へと移つてゆく過渡的な姿が見られるのが興味ある点である。Slingsby は Montaigne の Day-book からヒントを得て日記を書いたことを明記しているし、Trimalchio 家の日月の記録に個人的要素を多分に加味したものが、葬儀屋 Henry Mackyn の日記であると見なされてよい理由が充分にあるのである。そのことは、先に引いた Slingsby の日記の末尾に見るように、筆者自身が自分の日記のことを今日純日記を表わす語 *diary* を使わずに、“these commentaries or book of remembrance”と書き、また、Adam Eyre が自分の日記のことを“A Dyttnall or catalogue of all my actions and expenses from the 1st of January 1646”と呼んでいることから見てとれる。

このような日記の *commentarii* ないしは *commonplace book* 的性格は、ずつと近代に至つても見られるのであつて、かの18世紀の Johnson 博士の友人であつた Mrs. Thrale (1741-1821)、のちにイタリヤ人と再婚して Mrs. Piozzi となつた婦人の書き残した *Thraliana* が 1951 年に Oxford University Press から出版になつた⁽¹⁴⁾が、これは彼女が夫の Thrale 氏から、人の逸話や名言を書きつけるように与えられた notebook であつたのが、後にはだんだん diary になつて行つてしまつたものである。アメリカの Hawthorne の *American Note-books* や *English Note-books* は全く日記であり、Matthew Arnold の *Note-books*⁽¹⁵⁾ は、希・羅・独・仏・西・英6カ国語使用の *commonplace book* である。

また他面において、自伝や伝記のなかに、日記との中間的述作が存在する。先に婦人 diarist の最初のものとしてあげた Margaret Lady Hoby の岳父 Sir Thomas Hoby の autobiography の終の方は日記のようになつている。Lady Anne Fanshawe (1625-80) は夫 Sir Richard Fanshawe の伝記を書くとして、終りはやがて外交家の日記に堕してしまひ、今は *Memoirs of Lady Fanshawe* (1676; ed. by Beatrice Marshall, John Lane, 1905) となつている。

Lady Fanshawe は Charles II と共にフランスから帰国したうちの一人で、この人たちはフランスの回想録 (*memoirs*)

熱を持って来て、英国のこの世紀に日記類似の書き物を汜濫させる一因となったのだが、もう一つ、これ先んじて起つた新教精神、すなわち Puritans やスコットランドの Covenanters、中葉に起る Quakers などの熱烈な、時には狂信的な、宗教上の分派に属する人たちが、自己反省、精神的自己訓練の手段として日記をつけ始めることが、この 17 世紀に日記を多からしめる他の原因であつた。両系統の日記ともいふ、なかには一顧の価値もないつまらない記録も多く、余りに細かく調べるのは物好きの域に進むことである。しかし、この宗教家の日記の流れから、後日アメリカの Cotton Mather (1663-1728), Samuel Sewall (1652-1730), John Woolman (1720-1772), さては英国の Methodists の始祖 John Wesley (1703-91), Cornwall の Falmouth の Quaker 教徒 Caroline Fox (1819-71) 等の、注目すべき数々の日記が現われて来る。但し Quakers の始祖 George Fox (1624-91) の *Journal* (1694) は、日記とは名のみで全く回想録である。

註:

- (1) *The Meditations of Marcus Aurelius*, tr. by Jeremy Collier. Revised by Alice Zimmern. (The Scott Library), p. 36.
- (2) Tr. by Meric Casaubon. Everyman's Library ed., p. 25.
- (3) The Loeb Classical Library, *Marcus Aurelius*, p. 62.
- (4) Tr. by Michael Heseltine. The Loeb Classical Library, p. 91.
- (5) From the collection by Constance Davies in her *English Pronunciation* (London, 1934).
- (6) William Matthews 編の *British Diaries* (1945) には、1442 年からの日記が記録されているのだが、この本は未入手である。しかし、同じ編者による *American Diaries* (1945) という annotated bibliography で見ると、作者不詳のものや、モラヴィア教団 (Moravian Brethren) の日記までも収録しているから、やはり Edward VI のものが最古であるかも知れない。
- (7) *English Diaries* (1923), *More English Diaries* (1927), *Scottish and Irish Diaries* (1927) の三著。
- (8) ここに引く Machyn の日記は既引用の Constance Davies の著書の text による。
- (9) 同じく Constance Davies の text による。
- (10) Quoted in Ponsonby's *English Diaries*, pp. 71-2.
- (11) 1752 年英国で新暦 (New Style) が採用されるまでは一年の変わり目は 25 March の Lady Day であつた。それ故この頃の 1-3 月の日附にはこのように両年号が書かれた。
- (12) Quoted by A. Ponsonby in his *English Diaries*, p. 80.
- (13) この人のことも、G. M. Trevelyan の *English Social History* に英国内乱期の知識人の読書範囲を示す一例として言及されている。
- (14) *Thuidiana. The Diary of Mrs. Hester Lynch Thrale 1776-1806*, edited by Katharine C. Balderston, 2 vols.
- (15) *The Note-Books of Matthew Arnold*, edited by Lowry, Young and Dunn. Oxf. Univ. Press, 1952.

第 II 章 Shakespeare 研究に現われる日記

伝記資料の比較的少い Shakespeare には、もちろんその日記や手紙は残っていない。それどころか自筆の台本さえ残っていない、僅かに *Sir Thomas More* という作者不詳の作品に加筆した3頁が彼の唯一の自筆原稿であるとして、やかましい論議の対象になることは、知る人ぞ知るといふ有様である。それ故、自然本章においては、Shakespeare の研究中に登場して来る日記——そのなかには「いわゆる」を附けなければならぬものも含めて——が取り上げられる。

古今東西の文芸界を光祿する巨星 Shakespeare のことであるから、彼に関係する文献は断簡零墨といえども既に渉獵され研究しつくされているわけである。それ故、たとえば、1700 年までの Shakespeare に関するあらゆる allusions を集めて成った John Munro 編の *The Shakespeare Allusion Book*, 2 vols. (1909, 新版 1932) だとか、Ralli 編 *A History of Shakespearean Criticism*, 2 vols. (1932) などという書物を見れば、Shakespeare に関係のある日記類似の書き物も可なりの数に上ることと思われるが、余りに好事故興味に堕してしまうのも憚られるから、ここでは普通に Shakespeare の伝記や作品を読んでいて見つかるものだけにとどめる。そうすると大体次の5つの日記になると思う。

1. Philip Henslowe (?-1616), 1592-1609.
2. John Manningham (?-1622), 1602-1603.
3. Rev. John Ward (1648-78), 1661-1663.
4. Dr. Simon Forman (1552-1611), 1564-1607.
5. John Saris (?-1646), 1611-1614.

Henslowe's *Diary* と呼ばれて、エリザベス朝劇場史研究の貴重な文献となつてゐる日記は、今日いう普通の日記ではない。筆者フアリッパ・ヘンズロウは当時の劇場経営者であつて、俳優への給与、脚本の買入れ、上演脚本からの収入などを、目録記入した day-book, account-book なのである。しかも、このなかに Shakespeare の名が直接出て来るわけではない。その理由は、Shakespeare の属してゐた劇団は the Earl of Leicester's men (「レスター伯爵抱えの一座」)、のち James I 時代となつては the King's Men という劇団であり、この劇団は Burbage 父子の所有する the Theatre, the Globe, the Blackfriars

という系統の劇場にしか出演せず、Henslowe が俳優 Edward Alleyn (1566-1626) と共同で経営する the Rose, the Fortune, the Hope の諸劇場の興行は、the Admiral's men と the Earl of Worcester's men、後日の the Queen's men と the Prince's men によつて行われたからである。Shakespeare の属する内大臣一座 (前記 the Earl of Leicester's men の 1592-96, 1597-1603 年間の名称) が、Henslowe らの劇場に関係した形跡は、1594 年ごろに僅かに認められるだけである。

この日記帳により、当時の劇作家 Dekker, Drayton, Chapman, Chettle, Day, Rowley などが自分の作品を Henslowe に売っていることが分る。一作の値段は 1600 年以前では 6 ポンドが最高で、新世紀にはいると 10 ポンドになるものもあつたが、大抵は 4 人 5 人 6 人もの作者が一作品の報酬を分け合つていくことが多く、当時合作が多かつたことが分る。

日記は 1592-97 年は、上演作品名、上演日、利益の Henslowe の受けとり分の額が記入され、それ以後は作品の名前と著者、俳優や舞台道具製造者へ立て替えた金だけが記入されている。

Henslowe は若い頃(は山羊皮の買入れと精製、染物屋、質屋、金貸しをし、土地家屋のブローカーをし、河向うの Bankside に土地家屋を手に入れたところから、やがて劇場経営者になつて行つた。1613 年に同地に出来た「希望座」(the Hope) では、劇のほか(に当時行われた牛いじめ、熊いじめ (bull- and bear-baiting) も見せられるようになつてゐた。また同じ頃、享樂地 Paris Garden に Dancing Bears という inn も造り、これを、もう一人の仲間 Meade に経営させてゐる。彼は、今という特飲業的なものにも interests を持つてゐた男である。

妻はもとの主人 Woodward の未亡人 Agnes で、その連れ子 Joan が、Marlowe の名作 *Doctor Faustus* や *Tamburlaine* を演じて有名な Edward Alleyn の妻になる。そのことの記録が、この日記中ほとんど唯一の個人的家庭的記事として、次のように出てゐる。

Edward alen wasse maryed vnto Jone woodward the 22 <of> daye of octobr 1592 In the iiii and thirtie yeare of the Quenes Ma^{tie} Rayne elyzabeth by the grace of god of Jugland france & Jarland defender of the faith. (エドワード・アレンが 1529 年、すなわち神龍によりイングラント・フランス・アイerland の王にして信仰の擁護者なるエリザベス女王陛下の治下第 34 年、十月二十二日、ジョアン・ウッドワードと結婚した。)

もつと事務的な記入の部分を二つばかり例示してみよう。

A note what m^y allen hath the payd sence her husband went into the cuntry as foloweth 1593

Jm pd for howse Rente & for nayles..... xx^s

Jm pd unto him for keepinge of your horse..... ix^s x^d

Jm pd unto the Joyner for the beedsteed..... xv^s

(アレン夫人が良人が田舎に下向により支払ひし覚え次の通り、1593年。一つ、家賃と釘に支払ひ……20 志。一つ、彼〔本稿筆者註、これは義父 Henslowe を指す〕に貴殿〔本稿筆者註、これは Edward Alleyn を指す〕の馬の預り料として支払ひ……9 志 10 片。一つ、指物師に懐合の支払ひ……15 志。)

In the name of God Amen begininge at easter 1593 the Quenes men & my lord of Sussex to geather

R^y at frier bacone the j of [marche] Aprelle 1593..... xxxviij^s

R^y at the Rangers comodey 2 of [marche] Aprell 1593..... iij^l

R^y at the Jew of malta the 3 of aprell 1593..... iij^l

R^y at the fayer mayd of Italey y^e 4 of aprell 1593..... xxiiij^s

R^y at frier bacon the 5 of aprell 1593..... xx^s

R^y at kiage leare the 6 of aprell 1593..... xxxviij^s

(神の御名により、アメン、1593年復活祭より興行、女王一座サセックス卿一座合同。Frier Bacon により 1593年四月〔原本編者註、三月は誤記〕一日受取り……43 志。The Rangers Comedy により 1593年四月〔原本編者註、三月は誤記〕二日受取り……2 磅。「アルタ島のユタヤ人」により 1593年四月三日受取り……3 磅。「イタリヤの美女」により 1593年四月四日受取り……23 志。Frier Bacon により 1593年四月五日受取り……20 志。「リヤ王」〔本稿筆者註、これは Shakespeare 作の King Lear ではない〕により、1593年四月六日受取り……38 志。)

もつて如何にこの日記が今日の日記と範疇を異にするものであるが判らう。

さてこの日記、その他の Henslowe 文書は、Edward Alleyn の遺贈によつて出来た Dulwich College に保存されているが、この稿本を、1790 年に Shakespeare 学者 Malone (1741-1812) が借り出して閲覧し、自己の Shakespeare 全集の序 “Historical Account” を書く際に利用し、その一部をそこに印刷した。それから 1812 年に Malone の協力者 James

Boswell the Youngerによつて返却されたが、そのあいだに何者かのために一部が切りとられ、今 Malone が全集序文中に印刷した文句で残っていない部分が生じている。そして、更に、19 世紀のこの方面に相当な功績をのこした John Payne Collier (1789-1883) という Shakespearean critic が編集し、Shakespeare Society 刊行物の一冊 *The Diary of Philip Henslowe* (1845) として世に発表された。ところが、驚くべきことには、この学者は "Perkins Folio" という 1632 年のありもしない二つ折り版を発見したと称して以来、次々にでたらめを堂々と公表するという、何とも理解に苦しむ心理の持主であつたから、自己がその前に著した *History of English Dramatic Poetry and Annals of the Stage* (1831) その他述べた自説の支持に都合のよいように、この日記に改ざんを加えて返却したのであつた。そのことは長く知れずにいたが、1881 年 G. E. Warner 編の *Catalogue of the Dulwich MSS* により数カ所指摘され、次いで 1904 刊行の Walter W. Greg 編の type facsimile 版 *Henslowe's Diary* では、少くとも 14 カ所は Collier によるらしい改作箇所があると指摘されている。たとえばその一例として、第 19 葉左側ページの ll. 13-16 に

pd unto Thomas dickars the 20 of desembr 1597 for adcyrons to flosus twentie shellinges and
fve shellinges more for a prolog to Marioss tambelan so in all J save payde twentye five shillinges... } xxxv^s

〔「フォースマス」の書き加え欄料として 20 志、更にマローラの「タンバレイソ」の序詞欄料として、5 志、都合 20 志トマス・デイカーズに支払ひ……25 志。）〔この印刷では 2 行になったが、原稿では英文が 4 行、それを大括弧でくくり、xxxv^s がある。〕とあるが、これは *Tamburlain the Great* の作者が果して Christopher Marlowe (1564-93) であるかについては当時まだ疑いがあつたのに、彼は *History of Dramatic Poetry* において Marlowe 作とした。そのため、その記述に資せんとする加筆であつた。

John Manningham は Middle Temple の barristor で、Kent 州の Bradburn に住んでいた。この人の日記は、逸話、詩、墓碑銘、噂や冗談を記した notebook に近いものである。説教をたんねんに記録している。この日記の 1602 年 3 月 13 日の所にある、今は必ずしも信を置かれていない次の逸話が有名である。

Upon a tyme when Burbidge played Richard III there was a citizen grone so farr in liking with him that before shée went from the play shée appointed him to come that night unto hir by the name of Richard the

Third. Shakespeare overhearing their conclusion went before¹ was intertained and at his game ere Burbidge came. Then message being brought that Burbidge was at the dore, Shakespeare caused returne to be made that William the Conqueror was before Richard the Third. Shakespeare's name William. (Mr. Touse?)⁽²⁾

(ある時、ハーベジがリチャード三世を演じた時、彼を非常に所きになつた一女市民があり、彼女は劇場を去る前に、今夜リチャード三世だと言つて彼女をたずねて来るように言つた。シェイクスピアはこのしめし合せを洩れ聞いて、自分が先に行き、もてなされ、ハーベジが来ないうちに獲物にありついた。そこへ、ハーベジが玄関口に來たということが伝えられたので、シェイクスピアは「ウイリアム征服王の方がリチャード三世よりは先だ」と返辭せしめた。シェイクスピアの名はウイリアム。(タウス氏か?))

この日記の 1602 年 2 月 2 日に Shakespeare 作 *Twelfth Night* の上演を見たことを記している。また、Queen's chapel の Dr. Parry が友人であつたから、そのルートの聞き知つた Elizabeth 女王臨終間近の有様を伝えてくれる。

March 23, [1602/3].... I dyed with Dr. Parry in the Priuy Chamber and understood by him, the Bishop of Chichester, the Deane of Windsor etc that hir Majestie hath bin by fits troubled with melancholy some three or four monthes but for this forthright extreme oppressed with it, in soe much that shee refused to eate anie thing to receive any phisike or admit any rest in bedd till within these two or three dayes. Shee hath bin in a manner speechless for two dayes, verry pensive and silent, since Shrove tide sitting sonetyes with hir eye fixed upon one object many howres together, yet shee alwayes had hir perfect senses and memory and yesterday signified by the lifting up of hir hand and eyes to heaven a syne which Dr. Parry entreated of hir, that shee beleved that fayth which shee had caused to be professed and looked faythfully to be saved by Christe's meritis and mercy only and noe other means. She took great delight in hearing prayers, would often at the name of Jesus lift up her hands and eyes to heaven. Shee would not heare the Archbishop speake of hope of hir longer lyfe, but when he prayed or spake of Heaven and these joyes, shee would hug his hand. It seems she might have lived yf she would have used meenes; but shee would not be persuaded and princes must not be forced. Hir physicians said shee had a body of a firme and perfect constitution likely to have lived many yeares. A royall Majestie is noe priviledge against death.⁽³⁾

〔1603 年〕三月二十三日。……バリ博士と宮廷私室において食事をし、彼及びチチェスターの主教、ウインザーの聖堂司祭長その他の人から女王陛下が三四カ月前から間歇的に憂鬱に悩まされていられたが、ここ二週間ほどくこれにお悩みで、何も召上らず、葉も受けつけず、ベッドに御寝もならぬことがここ二三月つづいていたということを聞く。二日間ほとんど物をおつしやらず、ひどく沈みこんで黙つておられ、さんげ節期間以来眼を長時間一物につけて坐つておられる。それにも拘らず、常に意識記憶はたしかで、きのうは片手と両眼を天の方へ上げて、バリ博士がお願ひしたしるし、彼女が自身で私めた信仰を信じており、信仰にみちてキリストの功績と慈悲によつてのみ救われることを期待し、それ以外の手段には頼らぬ意のしるしを示された。陛下は祈禱を聞くことを大いに喜ばれ、イエスの名を聞くたびしばしば手と眼を天の方に向けられる。陛下は大主教がまだ御寿命の望みがあるなどと言うのを聞くことを好まれます、彼が祈つたり天の話やこれらの喜びの話をする時には、彼の手を握られる。手段をお用ひになればまだ承えられそうに見えるけれども、その気にはお成りにならず、帝王は強いることはできない。侍医たちは、何年も承えられそうな預言女体格のおからだをしていらつしやると言つた。王威といえども死に對しては何らの特權もあり得ない。)

そして翌日には *This morning about three o'clock hir Majestie departed this lyte, mildly like a lamb, easily like a ripe apple from the tree...*⁽³⁾ (今朝三時頃女王陛下はこの世を去り給うた、存羊のようにおだやかに、木から落ちる熟したりんごのように安らかに……) とある。

John Ward は Shakespeare の郷里 Stratford-on-Avon で 1662-68 年、教区牧師 (vicar) であつた人で、Shakespeare の甥たちがまた生きていた頃の町の人々の噂を記録した。この日記もやはり「いわゆる」のつく日記で、覚え書きや逸話の蒐集の類があるもの。次の Shakespeare の anecdote が、Manning の中の逸話のように有名になつてゐる。

I have heard that Mr. Shakespeare was a natural wit, without any art at all; he frequented the plays all his younger time, but in his elder days lived at Stratford: and supplied the stage with two plays every year, and for that had an allowance so large that he spent at the rate of £1,000 a year, as I have heard.

Shakespeare, Drayton, and Ben Jonson had a merry meeting, and it seems drank too hard, for Shakespeare died of a fever there contracted.⁽⁴⁾

(自分はシェイクスピア氏は何らなくも所のない、生れながらの才であつたと聞いた。若い頃は常に劇場に行つたが、晩年はストラットフォードに住んだ。一年に二篇の脚本を舞台に提供し、その報酬に多額の送金を得ていたから、年千ポンドの割で金を使つたと聞いている。

シェイクスピアとロバートソンとベン・ジョーンソンは楽しく会合し、飲みすぎたらしく、シェイクスピアはその時罹った熱病のために死んだ。）

Dr. Simon Forman は占星学者で、quack-doctor であつたとも言われる。この人の日記は J. O. Halliwell-Phillippe (1820-89) という Shakespeare 学者が 1843 年に Oxford の Bodleian Library 所蔵の Ashmole MS という稿本から Camden Society のために編集して、まさに出版しようとしたが、この占星学者のあまりにも赤裸々の不道徳な告白のために協会の委員は、もう校了になつていたので、出版を見合せることにした。そこで Halliwell-Phillips は、この時 16 部だけ作つた。のち 1848 年に、Forman の采図の notes を添えて、135 部の私版が出された。また 1607 年の日記もあつて、これも Halliwell-Phillips が検べたが出版に不適ということになつた。

Shakespeare の初期の夢想的な傑作喜劇 *A Midsummer Night's Dream* の Act II, Sc. i で Titania が言う美しい台詞のなかに、季節の混乱が人畜に及ぼす害悪を述べたところがあるが、これは Forman の日記の 1594 年の項に記録された甚しい気候不順に符号するものであることを、Halliwell-Phillips は Forman の日記から引用して示した。彼の日記は *A Midsummer Night's Dream* の制作年代をきめる外的証拠の一つに使われたのである。

Forman は日記のほかに、*The Booke of Plaies and notes Thereof* (劇及びその覚え書き帳) というものも書き残しており、そのなかに *Macbeth* の上演を Sat. 20 April, 1610 に地球座 (the Globe) で見たこと、*The Winter's Tale* のそれを Wed. 15 May, 1611 に同座で見たこと、などを書きとめている。

最後の John Saris は “the Eighteenth day of April Anno 1611, wee sett saile out of the Downes” (1611 年四月十八日本船はダウンスから出帆した) で始まり、27 Sep. 1614 の記入で終るところの航海日誌 *The First Voyage of the English to Japan* の筆者である。この日記には他に二つの異本がある。すなわち Ernest Mason Satow が編集して 1900 年に日本に紹介した *The Voyage of Captain John Saris, 1613* と、1635 年の有名な *Halliytus Posthumus or Purchas his Pilgrimes* に収められた text とである。しかし、これら以前からある texts ではこの日記は何ら Shakespeare 研究と関係があるわけではない。たまたま第三の稿本がロンドンの書店に売りに出されたのを日本の東陽文庫が買いとり、原物は全部をコロッタイフ版) として出版し、その sister volume の活版本を大塚高信教授の手になる詳細な異訓の脚註付きで出

版した(1948年)。そして大塚博士はこの校訂の仕事から「シェイクスピア筆蹟の研究」(昭和24年、創元社刊)を書いた。日本人で、英本国の今世紀の進んだ Shakespeare 研究に、一矢を報いるというか、ともかくも一寄与となり得そうな述作をなさしめる機縁となつたという意味において、東陽文庫版「ジョン・セリリスの航海日誌」はわれわれ日本の Shakespeare 研究学徒にとつては記憶されてよい日記なのである。

英国の東印度会社の極東派遣船隊の長として John Saris は、英本国出帆後、アフリカの Madagascar 辺や、Arabia の土民との危険な紛争などで可なり暇どつたのち、平戸('Firando')から半リーヴの所につくのが 11 June, 1613 で、それから完全な通訳がないというので駿河('Sorongo' or 'Surrunga')にいる三浦按針('Mr. Addams', 'Ange')が来るの待つて、江戸('Edoo')に向つて出発、博多('Fuccate')を通り大阪('Osaca', 'Ozaca')を通り、Meaco(伏見)近くで兵士の幾隊かを見て、駿河で大御所様('Ogoshō-Sam(m)a')すなわち家康に謁して贈物を奉呈、江戸につく前に大仏('Dabhis')を見て、人身御供に若い娘を時々献げさせる怪しげな存在の話を聞き、9月14日江戸到着、秀光に贈物をして、帰途は浦賀('Oringaw')までは船により、駿河で the Empereur すなわち家康から英国王 James I への親書を受けとり、11月6日平戸に帰着、12月5日、後事を Richard Cocks に委せて帰途につくのである。

堺は Sacay、長崎は Langasaque、下関は Xenina-saque と綴り、Crats は唐津で、Cattan(e) が刀、Fotiquis は仏で寺院のこと、という具合である。私のように自国の古いことを余り知らない者には、面白いことが沢山出て来る。処刑される前の罪人引廻しの光景だの、London(当時人口20万余)の賑やかさに比較して大阪、駿河(今の静岡)の繁昌ぶりなど、引用の食指がしきりに動くであるが、これらは筆者 John Saris のこととともに、次に予定している続篇「日本で書かれた英米人の日記」に譲りたいと思う。

註:

- (1) Quoted by Arthur Ponsonby in his *English Diaries*, p. 113. modernize したものはちよつと詳しい Shakespeare の伝記の本にはよく出ているが、最近出た D.C. Browning: *Everyman's Dictionary of Shakespeare Quotations* (1953) にも巻末に収録されている。
- (2) Quoted by A. Ponsonby in *op. cit.*, p. 114.
- (3) A. Ponsonby, *op. cit.*, p. 114.
- (4) D.C. Browning: *Everyman's Dictionary of Shakespeare Quotations* 巻末の text による。